



吹田市

文化財ニュース

No.24

平成15年3月31日

〒564-0001

吹田市岸部北4丁目10番1号

吹田市立博物館

TEL. (06) 6338-5500

FAX. (06) 6338-9886

<http://www.suitahaku.hokusetu.ed.jp>

垂水南遺跡で弥生中期の土器出土



▲弥生土器壺（中期）の出土状況

平成14年7月から9月にかけて吹田市垂水町3丁目において垂水南遺跡第58次調査が実施されました。ここでは古墳時代の大规模な河道とともに、古墳時代の多量の土器も出土しましたが、弥生時代中期の遺存状態の良好な土器の出土が注目されました。垂水南遺跡からこれほど多量に弥生時代の中期の土器が出土したことは珍しく、今後、弥生時代の集落研究に大きく資することになると考えられます。（詳しくは7・8頁へ）



平成14年度の主な文化財保存事業



▲榎坂遺跡発掘調査風景

平成14年度においても、吹田市では埋蔵文化財をはじめ各種文化財について、調査や保護を行ってきました。

昨年度登録されました千里山西1丁目所在の千里寺本堂に引き続きまして、今年度は岸部中5丁目に所在します大光寺太子館が、平成14年6月25日に国の文化財登録原簿に登録され、平成14年7月16日に官報告示されました。なお、両寺には、登録有形文化財であることを明示するため、登録銘板を設置しました（詳しくは4～5頁をご覧ください）。

埋蔵文化財の調査につきましては、今年度は、垂水南遺跡（第58次調査）、高城B遺跡、都呂須遺跡、市営岸部中住宅建替に伴う吹田操車場遺跡、土地区画整理事業に伴う榎坂遺跡（第6次調査）、高浜遺跡において発掘調査を実施しました。このほか、埋蔵文化財包蔵地及びその周辺地などにおいて、47件の試掘調査、76件の立会を実施

しました。（2月末日現在）

高城B遺跡では、中世を中心とする遺物包含層が確認され、土師器や須恵器、瓦器などの土器が出土し、さらに下層からはピット1基、溝2条がみつかりました。

都呂須遺跡では、中世の土師器、瓦器が出土するとともに、ピット1基、土坑1基、溝1条がみつかりました。

また、榎坂遺跡では、土地区画整理事業に伴い今年度も発掘調査（第4～6次）を実施しました。これらの調査では、古墳時代の堅穴式建物

跡、平安時代の柱穴・井戸・大溝、中世の溝跡などが見つかり、これらの遺構と共に弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器などの遺物が多量に出土しました。

これらの調査により、平成14年度では、朝日町遺跡、垂水南遺跡、高城B遺跡において遺跡の範囲が拡大されました。今後これらの地域については、埋蔵文化財の保護についてご協力いただくこととなります。

この他、昭和55年度に紫金山公園に移築しました吹田34号須恵器窯跡の覆屋が老朽化したた



▲範囲が拡大した遺跡

め、今年度^{たてかえ}建替を行いました。

埋蔵文化財^{いがい}以外の文化財事業としては、吹田市内に所在する文化財の調査を行うとともに、文化財保護条例^{ぶんかざいほごじょうれい}によって指定並びに登録された文化財を保護していくために、市より補助金^{ほじょきん}を交付^{こうふ}しています。今年度は、本市指定有形民俗文化財^{ぶんかざい}では「神境町地車」・「西奥町地車」・「浜の堂地車」の保存修理に対して、本市登録地域無形民俗文化財^{ぶんかざい}では「山田伊射奈岐神社太鼓神輿」・「泉殿宮神楽獅子」・「権六おどり」に対して補助金の交付を行いました。

また、文化財調査については、市内に残されていた古民家等の建築物^{こみんかとうけんちくぶつ}について、引き続き所有者のご協力を得て記録を行った他、大阪府文化財愛護推進委員^{おおさかぶんかざいあいごすいしんいん}や吹田郷土史研究会^{きょうどしけんきゅうかい}、市民のみなさんに委託して、市域内の神社境内にある石造物^{いせき}の所在とその内容について調査を行いました。

この他、博物館においては、平成13年度より始まり「埋蔵文化財発掘調査成果展『土の中からコンニチハ』」を、今年度も8月17日(土)～9月8日(日)の間を会期として開催し、市内における古代の遺跡や平成13年度に実施した発掘調査の成果について紹介しました。市内の古代遺跡につきましては、蔵人・垂水南・高浜・高城B遺跡など市内における代表的な奈良～平安時代の遺跡を紹介し、平成13年度発掘調査成果としては、土地区画整理事業に伴う榎坂遺跡第3次調査、朝日町遺跡1次調査、高城遺跡6次調査などについて紹介しました。また、発掘調査や



▲歴史講演会

出土資料等を整理する内業調査の作業の様子を、写真パネルや実際に使用している道具類、模型などの展示をとおして紹介した他、今回初めて「土器にふれてみよう!!」と題して、吹田12号須恵器窯跡出土の須恵器に直に触れ、破片を接合していただく体験コーナーを設けました。

あわせて、「歴史講演会」を成果展会期中に当たる8月24日(土)に、講座室において開催しました。大阪市立大学大学院医学研究科安部みき子氏を講師に迎え、『骨は語る—古代大阪のくらしと風景—』と題して、大阪府内各地で出土した獣骨を通して見た古代大阪のくらしの様子や景観などについて語っていただきました。この他、博物館文化財担当職員による近年の発掘調査成果報告も併せて行いました。



▲展示風景（土器にふれてみよう!!、内業調査風景写真など）



▲発掘調査の様子を再現

千里寺本堂と大光寺太子館が国の登録文化財に

現在、吹田市内には国指定の史跡^{しせき}2件、重要文化財^{じゅうようぶんかざい}4件、重要有形民俗文化財^{じゅうようゆうけいみんぞくぶんかざい}2件、大阪府指定の有形文化財^{ゆうけいぶんかざい}5件、史跡^{しせき}1件、市指定の有形文化財^{ゆうけいぶんかざい}1件、有形民俗文化財^{ゆうけいぶんかざい}7件、市登録の有形文化財^{ゆうけいぶんかざい}1件、無形民俗文化財^{むけいみんぞくぶんかざい}3件があり、建造物^{けんぞうぶつ}・仏像^{ぶつぞう}・絵画^{かいが}・遺跡^{いせき}、また祭礼や年中行事など、いろいろな種類の文化財が指定あるいは登録されています。

これらの文化財は長い歴史の中で生まれ、育まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産であり、所有者の方々とともに未来へ守り伝えていこうとするものです。

そして今回、新たに千里山西1丁目の千里寺本堂^{ほんどう}が平成14（2002）年2月14日に、岸部中5丁目の大光寺太子館^{たいしあき}が平成14（2002）年6月25日に国の登録有形文化財に登録されました。

これまでの文化財の指定という制度では対象となるものは歴史上あるいは芸術上価値が高い優品^{ゆうひん}で、その保存を一番の目的とし、現状を変えることに厳しい制約があります。

しかし、私たちの身近にありながら、文化財としての評価が高く、現在も社会生活の中で機能^{きののう}している建造物等が数多くあります。

それらを文化財としての価値^{かち}を維持しつつ、地域の活性化等^{かちいじ}のために積極的に活用しながら守ってゆく、つまり活用することが文化財を保存してゆくことにつながるという考え方の文化財保護制度が文化財登録制度です。

建築後50年を経過した建造物で、文化財としての価値が高いものが対象となります。



▲千里寺本堂（北西から）



▲大光寺太子館 (北から)

千里寺本堂

千里山西1丁目の高台にある千里寺の本堂は昭和3（1928）年に京都で行われた昭和大礼に際して建てられた饗宴場の遺構です。

大礼後、饗宴場の建物の一部を関西大学が譲り受け、講堂等として使用されていましたが、昭和28（1953）年に千里寺に移され本堂となりました。

本堂は桁行16間（28.8m）、梁行9.5間（17.1m）で入母屋造の屋根で、現在は瓦葺ですが当初は銅板葺の建物でした。

本堂の建築部材の大半は創建当時のものが使われており、飾り金具を取り付けた黒漆塗の豪華な二重折上格天井、鳳凰の装飾がある35燈用シャンデリア等の照明が饗宴場時代の雰囲気伝えていきます。

千里寺本堂は昭和初期の和風宮殿建築を現在に残す貴重なものです。

大光寺太子館

大光寺は天文8（1539）年に創立された浄土真宗の寺で、現在も境内は真宗寺院の景観がよく伝えられています。付近は吉志部東村と呼ばれた時代の雰囲気がよく残り、寺は村の中央を南北に通る古くからの道に面して建ちます。

太子館は境内の南西にあり、昭和13（1938）年に聖徳太子を顕彰するために建立された2階建の建物です。屋根は宝形造で、2階は柱をみせた真壁にし、手すり欄干や花頭窓を入れる等仏堂らしい和風に造りますが、1階は柱をみせずお壁にし、内部の柱上にはほう杖を入れ、欄間を回転窓にする等大正から昭和初期の学校の木造校舎の構造に共通する手法が取り入れられた和洋折衷の建物です。

地元の大工により建てられたもので、洋風の建築手法が取り入れられてゆく過程がみられる貴重なものです。

吹田操車場遺跡の発掘調査



▲今回見つかった谷状地形

吹田操車場遺跡は、吹田市芝田町などの吹田操車場跡一帯に広がる古墳時代～鎌倉時代の遺跡です。1967年工事中に瓦器などの中世遺物が発見され、その後1998年の(財)大阪府文化財調査研究センター(当時)による試掘調査によって吹田操車場跡ほぼ全域に遺跡が拡大すること、多様な性格を持つ遺跡であることが明らかとなりました。

今回の発掘調査は、この吹田操車場跡の北隣、岸部中1丁目にあります市営岸部中住宅の建替に伴い、約29×15mの調査区1か所を設定して、平成14年9月25日から11月5日までの間に実施したものです。

調査区西側には、標高約7mにおいて淡黄色粘土層・黄色シルト層などがほぼ水平に堆積し、東側では粘土と絡み合って硬質になっている礫層が厚く堆積していました。また、この両層の間には、砂・シルト・粘土・礫などの土砂が複雑に堆積しており、谷状地形や河道群が存在したことがわかりました。土砂はこれらの遺構が埋没する過程で堆積したとみられます。

谷状地形は、北西から南東方向に延びる窪み地形で、最も広いところで幅約17m、深いところでは深さ約1.2mを測りました。上記のように、埋土の堆積状況から、大別して2時期があると考えられます。新旧どちらの谷状地形も、北側に高く南側に低い傾向があり、北西方に広がる千里丘陵より南東の平野に向かって開かれていた谷だったとみられます。なお、谷状地形内においては、東岸よりむしろ西岸付近において地形の変化が著しかったことが確認されました。

河道群は、谷状地形埋没後に、その跡を流域として流れていました。土層が著しく切り合っ

ており、完全に埋没するまで絶えず流路を変えていたと思われます。この河川が何条存在したかはわかりませんでしたが、これらのうち最も明確なものは、幅約3m、深さ約1.3mを測りました。さらに、この流域の西岸には、谷状地形西岸の落ち際と併走する、幅約1.8m、高さ約0.2mの帯状の高まりが検出されました。流路を安定させるための護岸施設の痕跡かもしれません。なお、この河道群の堆積土より弥生土器の壺や甕、中世の瓦器碗などの遺物が出土しました。

今回発見された谷状地形は、当調査地の北西方向に広がる千里丘陵内の谷から流れ出る雨水などの侵食作用によって形成されたものではないかと考えられます。侵食作用が治まると、次は流れ込んだ土砂により徐々に砂や礫などが堆積し、その後谷を埋め尽くしてしまったものと考えられます。河道群の存在は、土砂の流入による堆積作用で谷が埋没した後も、川の流れが存在したことを示すものです。この河道群が、谷状地形の範囲内においてしか検出されなかったのは、谷を埋没させた軟弱な地盤を侵食しながら流れていたからなのだろうと考えられますが、あるいは、旧谷地形の両岸に護岸施設を設けるなど、人工的に制御されていたのかもしれません。

なお、今回の調査では、弥生時代中・後期および中世の時期と考えられる遺物が出土しましたが、河道群からの出土であることを考えあわせると、近隣地において、これらの時代のまだ発見されていない遺跡が存在する可能性が考えられます。



▲今回出土した弥生土器の壺

垂水南遺跡第58次発掘調査

1. 垂水南遺跡について

垂水南遺跡は吹田市垂水町3丁目・江坂町1丁目一帯に展開する、弥生時代～中世期の複合遺跡です。中でも中心となるのが古墳時代前期～中期の集落跡で、竪穴式建物跡、掘立柱建物跡、土坑、井戸、溝などの遺構が検出され、土師器、須恵器、木製品などの遺物が出土しています。その他、金、銅、鉄、玉造関係の生産も行われたことが確認されています。また、平安時代のものとしては、河道跡が検出されたほか、土師器、須恵器、緑釉陶器、銅銭（和銅開珎・万年通宝・隆平永宝）等の遺物が出土しています。これらの一部は弘仁3（812）年に成立した東寺領垂水庄に関連した遺物と考えられています。

今回の調査は、吹田市垂水町3丁目において平成14年7月～9月まで実施されたものです。

2. 調査の成果

現地表面から約15m下には黒褐色粘質土の古墳時代の遺物包含層（4～5世紀頃）があります。遺物包含層の下には厚さ10～20cmの黄灰色シルト層があり、この上面でピット、杭等の遺構を確認できたほか、調査区全体にまたがる規模の大きな河道とこれに重複するやや小規模の河道が確認されました。

検出遺構

ピットは調査区の南端、河道1の落ち際付近で合計14基検出されました。直径約0.1～0.6m、深さは0.1～0.8mを測ります。現状では小範囲のみの検出であるため、その性格は特定できませんが、南隣で実施された53次調査で建物の柱跡、樹木の根跡等が検出されており、これに関連したものと考えられます。

杭は調査区の南端、河道1の落ち際付近で2基検出されました。いずれも径約8cmの先端を尖らせたものがほぼ垂直に打ち込まれていました。

河道は2条確認されました。河道1は調査区全体にまたがる規模の大きな河道で、幅30m以上、深さ約1.8mを測り、南東方向に流れるものです。河道内の堆積層は砂を主体とし、数層の粘土層がみられ、短期間の急な流れによる堆積と長期間のゆっくりした堆積が繰り返された結果と考えられます。出土遺物は堆積層から弥生土器、土師器、須恵器などの土器類が多量に検出されました。河道2は河道1に重複する状態で検出されました。南東方向に流れる、幅約8～10m、深さ約0.9mを測るもので、堆積層は粘土を主体としています。少量の土器類が



◀A区
河道（古墳時代）
検出状況（北から）

出土しました。

出土遺物

遺物はピット、河道等の遺構と遺物包含層から出土しましたが、大部分は河道から出土したものです。弥生時代には弥生土器（壺、甕、高杯、鉢、蓋）があり、古墳時代には土師器（壺、甕、高杯、鉢、器台、椀、ミニチュア壺）、須恵器（杯、壺、はそう、甕）、韓式系土器、製塩土器、土錘、鉾滓片、鉄器（用途不明）、石製品（砥石など）、木製品（農具？、杭など）、獣骨、貝類、桃核があります。

出土遺物は大部分が古墳時代の土師器（4～5世紀）で、地元産の土器が最も多く、他に少量の他地域産（東海・近江・河内・山陽・山陰地方）の土器が認められました。弥生土器は後期の土器が多く、中期の土器は相対的に少ないのですが、遺存状態の良好な土器の出土が目立ちます。

3. まとめ

今回の調査では古墳時代のピット、河道等の遺構と弥生～古墳時代の多量の遺物を検出しました。調査区南西部の地盤の高い面にピットが確認され、河道からは、生活用具である多量の土器が出土したことなどから今回の調査区は古墳時代の住居域の一部と思われます。出土した土器の中に東海・近江・河内・山陽・山陰地方などの他地域産のもの、韓式系土器が含まれるのは古墳時代における当遺跡の立地のあり方を如実に示しているものと思われます。また、鉾滓片の出土は当調査区の東隣の第48次調査区で鍛冶生産に関連すると思われる遺構が検出されており、これに関連したものと思われます。このように古墳時代の集落跡の一部を検出するという成果を挙げることができました。また、古墳



▲B区 河道 検出状況（西から）



▲B区 土師器（古墳時代）出土状況

時代以外で注目されたのは、河道から弥生中期の土器が多量にしかも良好な遺存状態で出土したことです。これまでの調査では、弥生後期の甕が細片で少量出土することは時折認められましたが、弥生中期の土器がこれほど多量に出土したことはありませんでした。垂水南遺跡の営まれた時期が弥生中期まで遡る可能性が高いことから、今後周辺でこの時期の集落跡が検出されることが予想されます。弥生中期の遺跡としては吹田市内では垂水遺跡という弥生時代の代表的な集落遺跡がありますが、これに時期的に重なる部分が多く、今後の弥生時代集落研究の進展が期待されます。